

滋賀県公立小・中学校における環境教育の傾向と課題

学籍番号 1014713 竹田和也

指導教員 市川智史教授

1. はじめに

滋賀県は環境教育に熱心に取り組んできており、環境教育先進県と称されることもある。しかしながら、近年の滋賀県小・中学校の環境教育の現状や教員の意識については調査されておらず、実態は明らかにされていない。そこで本研究では、滋賀県の小・中学校における環境教育、および教員意識の現状をとらえ、小・中学校の比較、および全国調査との比較を含めた分析を通して、傾向と今後の課題を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

滋賀県内の公立小・中学校すべて（小学校 223 校、中学校 99 校）を対象に、郵送形式による質問紙調査を行った（2015 年 12 月 22 日発送、2016 年 1 月 31 日締め切り）。調査票は、学校調査と教員調査（各校 4～6 人）の 2 種類である。調査内容を表 1 に示す。回収数は、小学校 101 校、小学校教員 481 人、中学校 43 校、中学校教員 176 人であった。分析の際の有意差の検定はカイ二乗検定（有意水準 5%）を用いた。なお、全国調査との比較は市川（2015）を用いて行った。

表 1 調査内容

学校調査		教員調査	
番号	設問項目	番号	設問項目
問 1	学校目標の設定	問 1	環境教育に対する関心度
問 2	学校全体計画の作成	問 2	想起する指導内容
問 3	環境教育担当の設置	問 3	先進県認識
問 4	校内研修の実施	問 4	副読本『あおいびわ湖』
問 5	環境教育の位置付け	問 5	環境教育の優先度
問 6	実施時間数	問 6	学級の児童・生徒の環境行動の認識
問 7	全校活動・行事	問 7	環境教育の実践の現状
問 8	環境に関する委員会組織	問 8	環境教育の実践における問題・課題
問 9	「総合」の重視テーマ	問 9	環境教育の進め方
問 10	「やまのこ」、「うみのこ」の指導	問 10	環境に関する団体との関わり
問 11	「びわ湖の日」の取り組み	問 11	環境教育に関する実践の有無
問 12	「総合」・「特活」での実践内容	問 12	学習活動、体験活動、実践教科・単元

3. 分析結果

1) 小学校の傾向

- ①校内研修に比較的好く取り組む傾向がある（実施率：小 35.0%、中 11.9%、全国小 9.5%）。
- ②「総合」において「環境」を重視する傾向がある（重視率：小 69.5%、中 25.0%、全国小 50.0%）。
- ③児童会で環境の取り組みが進められているが（委員会設置率 89.9%）、活動内容は「飼育・栽培」「美化・清掃」で、全国的な傾向とほぼ同様である。
- ④学校目標に環境教育に関する内容が示されている学校は、環境教育を優先課題と位置付ける傾向があり、当該校の教員も優先度は高いと考え、実践率も有意に高い（推定実践率 88.3%）。
- ⑤環境教育の優先度は高いと考える教員の割合が中学校より高い（小 68.1%、中 49.7%）。
- ⑥環境教育の年間平均実施時間数を学年別に見ると 12.1～24.4 時間で、4、5 年が多く（4 年 20.7 時間、5 年 24.4 時間）、実践率も 4、5 年が高い（推定実践率：4 年 92.0%、5 年 96.8%）。
- ⑦事前指導は、「やまのこ」では森林や森林の働き、「うみのこ」では琵琶湖や水環境に関する学

習が行われているが、事後指導はどちらも新聞づくりが多い。

- ⑧「総合」・「特活」の実践内容、想起する指導内容の分析から、琵琶湖・水環境、琵琶湖の生物の学習や自然体験に取り組む傾向がある。
- ⑨環境教育を実践している教員は、琵琶湖をはじめとした豊かな自然や、滋賀の食文化に関わるような学習に取り組む傾向がある。
- ⑩副読本は中学校より小学校で使用され(小 28.3%、中 14.3%)、5年の使用率が高い(81.7%)。
- ⑪「びわ湖の日」の環境教育取組率は高いが(88.0%)、「美化・清掃活動」の傾向があり(90.5%)、「美化・清掃の日」で終わってしまっている。

2) 中学校の傾向

- ⑫択一式設問のほぼすべてにおいて小学校を下回る傾向がある。ただし、目標設定、位置付け、全校活動・行事、委員会組織、「びわ湖の日」、団体との関わりは小学校とほぼ同様である。
- ⑬小・中学校間で有意差が認められたのは、校内研修、関心度、先進県認識、副読本、優先度、実践の現状、実践の有無で、すべて中学校が下回っている。全国比較では、校内研修、優先度は有意差が認められず、全国的な傾向と同様である。
- ⑭環境教育の年間平均実施時間数を学年別に見ると4～5時間で小学校よりかなり少ない。
- ⑮各教科での指導を別にする、中学校の環境教育は「総合」・「特活」で「エコキャップ」(60.5%)、「地域の美化・清掃」(55.8%)、「資源回収」(55.8%)、全校活動・行事で「美化・清掃活動」(86.1%)を行っている程度である。
- ⑯学校目標に環境教育に関する内容が示されている学校は、環境教育を優先課題と位置付ける傾向があり、当該校の教員の実践率は有意に高い(推定実践率 66.7%)。
- ⑰環境教育を実践しているのは全国と同様、主に「理科」「技術・家庭」の教員で、実践している教員の学習内容、体験活動もほぼ全国的な傾向と同様である。
- ⑱副読本の使用は、ほぼ理科の教員に限定されており(理科教員使用率 40.4%、他教科 0.0～10.0%)、見たこともなく、存在も知らない教員が多い(31.3%)。
- ⑲小学校同様、「びわ湖の日」の取組率は高いが(83.3%)、「美化・清掃活動」の傾向がある(84.8%)。

4. 考察

上記①～⑱で明らかにした傾向に基づき、今後に向けて重要な課題を考察した。

- ①環境教育の推進において教員の資質向上を図ることは重要であるため、最低でも年に1回は、校内で環境教育研修会や研究会を行い、校内研修実施率を上げることが求められる。
- ②学校目標の設定は、環境教育の位置付けや教員意識、実践率など、環境教育の推進に影響を及ぼすため、学校目標に環境教育に関する内容を盛り込むことが求められる。
- ③「やまのこ」「うみのこ」の事後指導が新聞づくりで終わってしまっているため、体験から学んだことをより深化させ得るような、事後学習プログラムの開発や充実が求められる。
- ④「びわ湖の日」を「美化・清掃の日」に終わらせるのではなく、「びわ湖の日」の趣旨に鑑み、美化・清掃活動以外も含めた環境教育活動の実践・充実が求められる。
- ⑤全国と同様に低調傾向を示す中学校では、教員の多忙さに配慮しつつ、学校目標への盛り込み、「総合」の重視テーマへの位置付け、校内研修などの方策を進め、学校全体の教員意識の向上と実践が求められる。
- ⑥副読本を5年以外の学年や理科以外の教科でも使用できるように、認知度を上げる取り組みや使用方法の明確化、内容の充実が求められる。

[文献] 市川智史, 2015, 『全国小・中学校環境教育調査報告書(2014年度調査)』(ウェブ掲載).